

ククイノキ (*Aleurites moluccana*) の用途

ー在来のさまざまな用途

果実: 灯油(ろうそく)、芳香油、
香辛料、薬(痛み止め・
塗り薬)、供物、遊戯

内果皮(殻): 肥料、燃料

樹皮: 薬(赤痢)

材: 燃料、建材

葉: 小食品の包装

ー工業用原料として

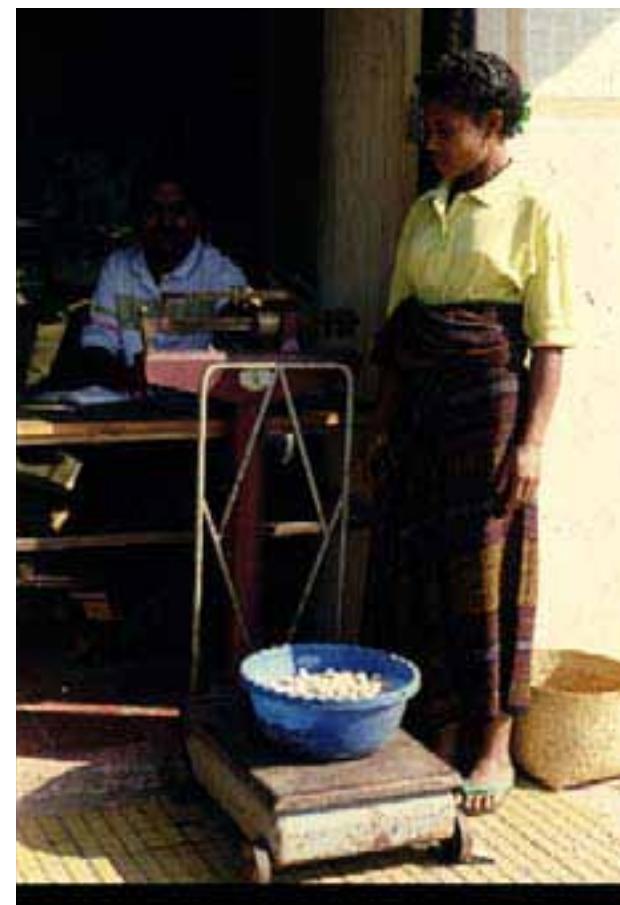
油脂: 化粧品、塗料、印刷
インク、薬(塗り薬)

材: マッチの軸、パルプ材



中国から導入された種類が、合衆国、アルゼンチンなどで栽培され、桐油生産が行われる。日本でも、木材の表面加工、木製品のつや出し、加工、防水に利用される。





クミリなどの油料樹種に注目すると何が見えてくるか？

- 土地利用変化の履歴
- 住民農業における土地資源利用の戦略
- 「制度」をめぐるポリティカル・エコロジー
 - ・ 土地所有をめぐる「ゲーム」
- 物産流通のネットワーク
 - ・ Globalization と Localization

事例C

「穀作農耕における『個体』と『群落』の農法」『農耕の技術と文化』24号 : 89-113, 2001.

地域の個性はなかなか変わらないという点を意識して、地域比較を試みようとした作品

*"Kemiri (*Aleurites moluccana*) and Forest Resource Management in Eastern Indonesia: An Eco-historical Perspective." Asian and African Area Studies, No.2: 5-23, 2002.*

博物学的な关心、ものごとの細部にこだわることの重要性を意識して、食用油を通じて地域比較を試みようとした作品

事例D

「植民地経営と農業技術－台湾・南方・満洲」
(今井良一と共に著)

田中耕司(編著)『岩波講座「帝国」日本の
学知 第7巻 実学としての科学技術』
岩波書店、pp. 99-137, 2006.

「帝国」日本の学知で考えようとしたこと

1. 戦前・戦中に 日本の農学者や農業技術者が
台湾・朝鮮・南方の経営にどう関わって
きたのか？
2. 戦後、その活動がどう継承されたのか？
あるいは封印されたのか？
3. 当時の「科学者総動員体制」をみたとき、
現在の科学、とくに農学はどんな状況にある
と考えられるのか？

橋本傳左衛門(1907(明治40)年東京帝国大学農科大学入学)の回想から

日清、日露の戦勝の結果として、台湾、朝鮮を領有し、南満洲を勢力圏としたので、国民の意気はしきりにあがり、さらに機会があれば、ドイツのごとく遠く海外に進出しようと、いう気分が国じゅうにみなぎっていた。海外進出といっても、空理空論はだめだ。農業的植民で、がっちりと地歩を固めなくてはいけないと、考え方自ら任じて、駒場に入学して来た青年が、本科にも、実科にも当時は相當にいたものである。

(橋本傳左衛門『農業経済の思い出』橋本先生長寿記念会刊)

台湾における植民地経営と農学・農業技術

- 1895(明治28)年 台湾領有 → 1896年台灣農業試驗場を設置
1903(明治36)年 台湾総督府のもとに農業試験場を再設置
- 1928年 台北帝国大学に理農学部を設置(1943年農学部を分離)
- 台湾糖業の振興
 - 台湾総督兒玉源太郎、総督府民生長官後藤新平
 - 総督府殖産課:札幌農学校出身者で固まる(在来小規模製糖の改良)
 - 「農学の専門家はいても、新規の事業計画は不得手の農学士ばかり」
 - 新渡戸稻造(札幌農学校出身)を総督府に招く
 - 『糖業改良意見書』→甘蔗の品種改良、近代的製糖工場の建設
 - その後、多数の農学士が甘蔗の栽培技術改良・普及に従事
- 在来稲作の改良:日露戦争後に本格的に着手
 - 1900年 水田面積20(総作付面積30. 5)万ha、生産量32. 3万トン
 - 1938年 水田面積54. 3(64. 4)万ha、生産量147. 3万トン
 - 移出米検査(1904年~)、赤米除去(1906年~)、水利改良事業(1907年~)
 - 「栽培と品種改良の面における大成功であった」(盛永俊太郎「台灣の稻作発展と稻の種類改良」『日本農業発達史』第9巻、1954)

朝鮮における植民地経営と農学・農業技術

- 1905(明治41)年 日露戦争後の第二次日韓協約
1906(明治42)年 韓国統監府勸業模範場を水原に設置
(1910年の日韓併合により朝鮮総督府勸業模範場、29年農事試験場)
- 加藤茂苞(農事試験場初代場長)
日本人技術者の姿勢の変化を反映して朝鮮に即した技術開発へ
「朝鮮と内地とはいうまでもなく気候、土質又は農家の経済状況等に於て大なる相違がある。為に内地の農業を其のままに朝鮮に移したもののが、恐らく適當なる解決を得るものであったかどうか、その中には奨励の方法を誤ったことがあり、それが今日迄残っていることもあると思われる。」
(農林省熱研センター『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』農林統計協会、1976)
高橋昇:遺伝育種の研究者から朝鮮の畑作振興に生涯を捧げる
「日韓併合以来、ほんとうに朝鮮の農家に定着して役立っているのは、稲の正条植だけではないか。まず農家に飛び込んで、謙虚に教えを受けるべきである。」 → 実態調査記録『朝鮮半島の農法と農民』が近年刊行
- 成果をあげた水稻と棉の品種改良:佐藤健吉、嵐嘉一